国際社会に於ける実用（技術）英語の実践
Practice of Technical English in International Society

佐藤　博一

English is now not knowledge, but requires daily practice. Japanese college graduates studied English for more than 10 years, since junior high school, but most of them cannot manage English use in the international society. This report proposes a solution to cope with the above based on my overseas experience.

実用英語と言う言葉は学校英語に対比してよく使われる。学校英語が英語知識に重点を置いているのに対して、実用英語は実社会で英語を実践する Skill を意味すると考えられる。以下に私の海外での実践経験を踏まえて日本人が抱える英語の問題点を述べたい。

１．海外での私の実務経験

米国駐在：

- ✧ ITA(International Tape Association)の技術委員を１年半担当し、磁気テープ等のアメリカ規格作成に参画
- ✧ 磁気テープに関するセミナー及びテープクリニックをアラスカおよびハワイ州を除くすべての州で実施。これは大きな成功を収め、自社テープ製品の世界ブランド化に大きく貢献した。

欧州駐在：

- ✧ ECMA(European Computer Manufacturer Association,欧州コンピュータ工業会）の技術委員を７年間担当。ECMA 規格の作成に参画。　本部はスイスのジュネーブにあり、ECMA 規格の殆どがそのまま ISO のコンピュータ規格になっている。名前の通り欧州におけるコンピュータの業界団体であるが、構成メンバーも活動も世界的であるため、数年前に名称を「Ecma」とした。「エクマ」と呼ぶ。
- ✧ セミナーおよびテープクリニックを、アイスランドを除く全ての西欧諸国で実施し、アメリカ同様に大きな成功を収めた。
- ✧ 自社イギリス工場が自社グループ内で最初に ISO9000 シリーズの認証を取得した。

2．国際社会に於ける実用（技術）英語実践の重要性

日本実用英語検定とか TOEIC 等は実用英語を看板にしているが、国際社会で技術的な仕事をしている技術者にとっては少しも実用的でない。どう見ても日本の学校英語にビジネス面での多少の色づけをしたにすぎない。以下に実用英語の実践例を述べたい。

2.1　実用（技術）英語の実践例

（1）　　セミナーおよびテープクリニック：　殆どは欧米諸国のオーデイオ店々頭で実施した。セミナーも含めて聴衆の規模は２−３人から多い場合はホテル等の大ホールを使って２００人位が対象であった。米国ユタ州ソルトレーク市にあるブリガムヤング大学や欧州のフィンランドの内陸部のタンペレ市で学生対象のセミナー、販売店を外国旅行に招待した船による洋上セミナーもあった。このキャンペーンの我々の狙いは、そのころはカセットテープが普及し始めた時期にあり、一般顧客にカセットデッキ（ハードウエア）とカセットテープの正しい使い方を理解してもらうことにあった。会社がお金を使ってキャンペーンを行うので、究極の狙いは自社ブランドカセットテープのブランドイメージと販売向上に結つけることにある。オーデイオ店で実施のクリニックはその店の顧客が自分のデッキ、またはテープを持ち込んでくれば、測定器を使ってそれらの相性を診断するというものである。アメリカやイギリスでは言葉の問題はなかったが、欧州各国では一般の聴衆は必ずしも英語が分からないので、現地代理店が通訳してくれた。勿論、英語と現地語である。製品技術が分かり、しかも日本語と現地語の通訳ができる人を見つけるのは不可能に近いが、英語と現地語ならどの国でも殆ど問題ない。

スペイン、マドリード市内でのセミナー・クリニック風景

（2）　　国際会議：　もう一つの実践例として、ITA や ECMA の国際会議がある。以下、ECMA を例にとり、英語の問題点に触れてみたい。

ECMA 技術会議での英語：国際技術会議と言っても、国連等の大きな技術会議もあれば、２会社間の小さな国際会議もある。ECMA 技術会議の場合は各専門委員会(TC: Technical Committee)に分かれるので、普通は２０人程度の会議である。特徴として、最先端技術を討議するので、多くの場合は、その技術を開発した技術者が出席する。出席者は皆、コンピュータ技術の専門技術者なので専門外の人が出席しても質疑応答の激論を戦わすことはできない。その先端技術に明るい通訳業者を見つけることも不可能である。　各国の出席者で通訳が同席している会議は見たことがない。出席者は英国や米国のコンピュータメーカー（ICL, IBM, HP 等）の出席者はいずれも英語が達者なのは当然としても、それら以外、ドイツ、フランス、イタリー、スペイン、フィンランド、スエーデン、ノルウエー、オランダ、ベルギー、スイス等からの出席者も皆、流暢な英語である。お互いに近接しているという土地柄もあるかもしれない。

私はこれらの英語以外の国の出席者に聞いてみた。
「貴方の英語は専門的でしかも流暢であるが、英語学校で習ったのか？」
答えは、英語学校ではなくて、大学までの正規の学校教育を通じて習得したとのことである。
日本から出席技術者の英語下手は彼らもよく知っており、日本からの出席技術者は皆、日本の大学を出ており、しかも、中学校以来最短、１０年間は英語を勉強していると言ったら、１０年間も英語を勉強していて、なぜ英語が使えないかと驚いていたのを思い出す。

2.2 国際技術会議で英語の必要理由

ECMA を例にとって説明すると、ECMA 活動の主目的は先端技術製品の世界的互換性を目指して世界統一規格を制定することにある。世界統一規格が出来れば、先端技術製品の市場が急速に成長し、普及が図れる。従って各メーカーは自社の技術を世界の統一規格にしようと懸命になる。特に互換性を必要とする技術製品は尚更である。

統一規格にするための駆け引き：
私が在任中に関わったものに、コンピュータ用光デイスクカートリッジ３００mm　(旧 LP レコードサイズ)、１２０mm (CD サイズ)、９０mm (フロッピーサイズ) や　磁気テープ、フロッピーデイスク等があり、デイスクでは市場性のある１２０mm、９０mm での攻防が激しかった。磁気テ

ープではデジタル録音技術が導入された頃で、例えば DAT(Digital Audio Tape)には、或るアメリカのメーカー方式が規格化で先行したが、私のグループ会社から、別の方式（DATA-DAT）規格化して欲しいとの要望があり、規格化に尽力した。一応規格化されたが、後で市場に残ったのは先行 DAT である。これは規格化で先行 DAT に１年以上遅れたこともある。同じような DAT を２つも規格化するには他の出席者から異論もあった。昔のビデオテープ、SONY ベータマックスとビクター社の VHS ビデオテープを引き合いに出し、ベータマックスを買ったユーザーはひどい目に遭っている。その二の舞は避けるべきであるなどであった。

私見では、今後とも、最初の規格段階から１社方式に絞るのは難しいと思われる。最終的にはエンドユーザの判断に委ねることになろう。
そうは言っても、競合しているグループが２つ以上あると、弱いグループは規格化まで行かずに途中で脱落する。

ブルーレイ方式か、HD-DVD 方式か：
今その渦中にあるのが家庭用光デイスクで、ソニー・松下グループのブルーレイ方式か、東芝・NEC グループの HD-DVD 方式かの２陣営に分かれての各グループ拡大競争が挙げられる。国際的な主導権争いに勝つためには、技術力、COST,および、販売力等総合的に優れていなければならないが、見落としてはならない重要な要因に実用（技術）英語力が挙げられる。

グループ拡大のための実用英語：
各陣営ともグループを拡大するために水面下では非公式国際会議やロビー活動を行う必要がある。国際的な他企業や団体を自分のグループに引き入れるためである。相手を説得できる技術文書、プレゼンテーション Skill は不可欠である。

実用（技術）英語の実践力を身に付けるには英語知識だけではだめで、日常生活を通じて、その知識を実践することであろう。今は通信手段の発達、気軽に海外へ行けるなど、その気になれば英語漬けの毎日を送ることはそれほど難しいとは思えない。更には、日本の大学も米国等の大学とタイアップして、専門課程の一部教科を全て英語で行うなど、既に行っているところもあるようだが、留学せずして、日本でそれ相当の力をつけ、そのような Skill を持った多くの技術者を育成するのは時間の効率的利用、費用の節約の点からも必要なことだ。■